
泉くんと平和な日常

猫神 当麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泉くんと平和な日常

【Nコード】

N4321F

【作者名】

猫神 当麻

【あらすじ】

無駄なことに全力を尽くす高校二年生、泉くんと回りの女の子とのドタバタコメディー。みなさん泉くんに注意してください、何かを思い付いたが最後、周りを巻き込んだラブコメに突入！

く不思議空間へようこそ（前書き）

ちよつとした暴力表現と少しエッチ表現があります。そんなの読めるか！と思う方は読まないでくださいね。

不思議空間へようこそ

「っ!？」

またやつちまった……。

俺の名前は泉^{いづみ}今はこの作業に没頭中。だが、どうしてもうまく行かない、何時間もやり続けてるのに……

体も動かなくなってきたし、頭痛が酷くあまり意識が保てない……

俺はここで、こんな所で倒れるのか……

ナンテミジカイジンセイダッタんだろう……ん？

ドタドタドタツ……

部屋の外から階段を上がってくる音がする……

ドタドタドタツ……ガタンッ!

……転んだ、俺が仕掛けたトラップに引っ掛かったのだろう……

ドタドタドタツ……バタンッ!

「お兄ちゃん!死ねー!!」

黙れ小娘、こっちは頭痛が酷いんだ……て、なんだよお兄ちゃんて

？ちなみにこいつは幼なじみモドキ、決して妹ではありません、で……名前は……なんだっけ？

「人の名前を忘れるなポケッー！」

殴られた……パワー全開で殴られた……っーか……

「いてえー！？」

何すんだこのバカ女、せつかくお前のために階段の水コリを取りワックスでツルツルにしといてあげたのに。

「あんた毎日、毎日起こしに来て上げてる私のことを寝ぼけてたとしても忘れるんじゃないわよっー！」

あー、はいはい分かりましたよ、っーか転んだことにたいしては放置ですか？あゝ、と、こいつの名前は、佐藤 帝みかどちゃんです。皆さん覚えましたか？では、忘れてもいいですよー。

「いい加減起きなさい！！早くしないと学校始まっちゃう！」

フッ、この愚かな女にもうそろそろ教えといてやるか……と言うか寝ていませんが。

「帝、お前の腕時計とこの目覚まし時計を見比べて見る」

そうすれば自分の愚かさに気づくはずだ。

「えっ？あっ！あゝ！！あんた、また私の時計の針進めたわね！！」

何バカ言ってるんだ、針を進めたのは俺じゃなくてお前の妹のみーちゃんだ。

「あんだ人の妹使って何やってんのよ!!」

みーちゃんはお前と違って純粹だから心よく針を動かす役目を引き受けてくれたぞ。

「そう……、あの子にはまた私の妹に生まれてきたことを悔やむくらいお仕置きしなくちゃね……」

や、やめるんだ!、お前は実の妹に何をするつもりなんだ!!

「え?何って……そんなこと言えるわけないでしょエッチ!!」

おい……。まったく、こいつのキャラ属性はイマイチわからん。

「それよりあんたはなんでそんなに眠そうなの?…なんか嫌な予感がするわ…」

おおー!まず驚くのはこいつの感のよさだ、こいつは台風が来る時期を正確に言い当てることができる。最近、人間の限界を越え始めてるような感じだが、その辺は《触らぬ神に祟りなし》、放置プレイだ。

「ちょっと!なんか言いなさいよ!」

だまれ小娘!お前の声は寝不足の俺の頭には対応できない。つか、ピンクか……可愛い下着だな。

「なっ！！なんであんたが私の……その……しってるのよっ！！」

顔を真つ赤にした帝がスカートを手で押さえる。

フツ、そんなことじゃお前のパンツ……魅惑の逆三角地帯は隠せないぜ……。

お前が毎朝俺を起こしてくるのは確實、なら対策は十分に立てられる。帝、自分の足元を確認してみる。つーか、部屋に入ってきたときに気づくだろう普通。

「なっ！！なんで床一面力ガミになってるのよ！！」

今度は手でスカートの前を鞆で後ろを押さえてしゃがみ込む。

さすがにもう下着が目に入ることはない、残念。ちなみに徹夜で床に《銀の板》を敷き詰めて鏡面加工しただけだ、床一面の鏡なんて高くて買えるはずないだろ。

「……くらいなさい、今の私の思い……必殺……」

ちよっ！！まて！！ヤバイあれがくる、あの技が！！だから、それはマズイだろー！！

「猫の昼寝！強化版！！」

右足で地面を蹴り重心が前に来た瞬間に左足を支えに衝撃を足から腰に、そして肘に伝え人体の急所をついてくる。

「させるかー！！」

俺は気合いの叫びと共にいち早く帝と俺の間に布団を挟む、布団が緩衝材となってダメージを軽減できるは……げふうっ！？

「ふんっ！！布団ごときで私の攻撃を防げるとでも思ってたわけ！！」

くっ、骨が折れるかと思っただぜ……。《必殺、猫の昼寝とは殴られ倒れた相手がまるで昼寝をしている猫に似ていたことから名前をつけられたのだ》ちなみに俺が命名したんだが一番俺自身があの技を多く味わっている。

「じゃ、私は下で待つてるから早く着替えて下りてきなさい！」

仕方ない、着替えるか。さて、毎日お世話になっている制服を着てと、寝癖はあまりついてない。

まあ、寝てないから当たり前か。よし、準備完了。我ながら中々のタイムだ。これならカップラーメンにお湯を注いで着替えればちょうどよくラーメンが食える。さて、下に下りるか。階段は注意しておりましよう。うお、かなりの確率で滑る。今度からやりすぎないようにしよう。と、やっと下まで下りれた。するとリビングから、

「中々のタイムね、流石、女の子を待たせることはしないわね。」

俺はリビングに向かい理不尽なことを言っただ声の持ち主を見る。もう五十近くになるのになんで帝と並ぶと姉妹にしかみえないんだ、母よ、身内に歳を取らない化け物があると洒落にならん。あと、俺が女の子の為なら頑張る思春期ちゃんみたいなことを言わないでくれないか。

「だ〜れが化け物か。それでも歳とったわよ、昔はもっとピチピチだったわ」

うん、確かに歳とったな。ピチピチとかもう死語に近い言葉をそう簡単に使うのは年寄りだけだ。安心した、俺の母親は人間でした。

「うわああーん！帝ちゃん息子がイジめるー！」

そういつて母は帝の胸に飛び込んで顔をグリグリと擦りつけてる。
あゝ、うらやましい。

すると顔を真つ赤にした帝が、

「ちょっとおばさん！やめてください！！あつ！！」

急に大きな声を出して母を引きはがす、帝は息が切れながら胸を押さえて後ずさる。

「ふふふ、成長したわね帝ちゃん。中々の感触だったわ。」

流星は俺の親だ。そして、なにかに満足したのか母は音もなく立ち去って行った。今だに自分の母親がなんの仕事をしているかわからん。さて、もうそろそろ学校に行かないと本当に遅刻するな。

「学校行くぞ、帝。」

靴を履き玄関を開け外にでると今日も青い空に雲が流れていた。少し歩くと息を整えた帝が後ろから追いついてきた。

「まったく、おばさんのセクハラ癖をなんとかしてほしいわ……。」

少しやつれ気味に帝が言う。お疲れ様、それに毎度お前が母にセクハラされるおかげで世界が平和にたもたれる。それにもう慣れただろ。

「うう……、もう慣れたと思ったけど恥ずかしいことには変わりないもん」

ま、気分を変えて今日も一日がんばりますか。

「そうね、いつまでもうじうじしてられないし。気合い入れていくわよっ！」

元気を取り戻した帝の笑顔をみながら学校への道のりを進む。

今日も一日平和でありますよーに。

く不思議空間へようこそく（後書き）

まだまだ続きます

泉くん、遂に動き出す？（前書き）

さて、食後の運動といい部室へ向かう泉くん。泉くんにとっての部屋、いや王国。これから何かが起きる！？

泉くん、遂に動き出す？

いつもの朝を迎え、無事に我が学校に着いた（片道約二分ぐらい）
私立式里^{にりてがっこう}学校なんとも微妙な名前だ……、

しかし、眠い……眠すぎる……

教室に来たのはいいがあまりの眠さに担任の声が子守唄に聞こえてくる、とりあえず恥もプライドも関係なしに教室で寝ます。そんな私を許してください。

「許すかー！！」

横から大きな声が聞こえる。幻聴かな？いくらなんでも授業中に大声をだすおバカさんはいないはずだ。

「俺だつて眠いんだよ！！いや、俺だけじゃない！！この教室の皆が思ってることなんだよ！！なのに……、なんでお前は教室の後ろで布団を敷いて寝ようとしてるんだー！！」

目を開け横を見ると長身で、ちょっとつり目で冷たい雰囲気漂わせているが髪を茶色に染めているおかげかちよつとクールなイケメンな感じである。ただちよつとおバカな発言が多い少年なのである。誰が騒いでると思ったたら君だったか、巽。

彼の名前は坂宮 巽

（さかみやたつみ）我がクラスにいる《最強の双子》の片割れであり、俺の悪友（親友）である。

なにが最強かと言うと、まあー、いろいろである。それより、なんで寝ようとしているか、だと？仕方ない、君の質問に答えよう。そ

れはだね、校長先生達が成績さえ維持してくれば別に何してもいいよー、って言ってたからだ。

「いくらなんでも自由過ぎるだろうー!!お前は!!」

えー、そんなこと言われてもー、うーん、仕方ない、じゃー昼休みまで寝るからそれでいいだろう?俺は布団を頭から被り自分の空間に引きこもる。

「問題はお前の睡眠の時間じゃねえ!?おい聞いてんのか!?頼む!!無視しないでください!!お願いします!!」

横でごちゃごちゃと言っているがなんか最後には土下座し始めた。だが、こっちはもう睡眠の国に旅立ちかけているので無理に近い。

……ではお休み。

・
・
・

・

・

……何やら周りが騒がしい。目をこすりながら体を起こすともう昼休みになっている。

「やっと起きたわねー、あんたは学校に何のために来てるのよ」

ん?帝じゃないか、おはよう。まずは布団を畳んでロッカーにしまつて、と。そして腹減った弁当くれ。

「帝ちゃん、そんなやつに弁当なんかいらないよ!」

「たっちゃん? 泉くんに冷たい態度とると私、たっちゃんのこと
どうするかわからないよ?」

声がした方向に振り返ると、たっちゃんこと巽とその双子の妹、坂
宮 咲通称さっちゃん、俺は普通に咲って呼ぶけど。特徴は茶髪の
背中まで伸びた長い髪と双子の兄、巽と同じく長身であり、あれ
だ、モデル体型? 見たいな感じ。

ちなみに二人合わせて《最強の双子》と言い世界でもその名は轟き
彼らに刃向かうものはいないと言われている。

「泉くん、私今朝早く起きて泉くんのためにお弁当作ってきたの
!! そんな小娘のありきたりな弁当なんかより私のこの心に秘めた
熱き思いをこのお弁当を食べて(ハート)!!」

キラキラとした、つーか恋する乙女見たいな目でこっちを見てる、
…そんな目で僕を見ないで!! 恐いから!!

お腹減ってるから食べてあげたいのだがやっぱり帝の弁当をたべる
よ。

咲の弁当はなんか……いろいろと重いから俺はいいよ、巽に食べさ
せてあげてください。

「……ありきたりな弁当……小娘……」

あ、帝が心に傷をおった。いつも仲良しの咲からそんなこといわれ
たら流石に傷つくか。まあ、慰めてやるかな、と思ったら、

「ふ、ふん!! そんなゴミみたいな愛情と精力剤しか入っていない
弁当よりマシよ!!」

おおゝ心の傷を勇氣に変えて戦いを挑むとは成長したな、幼なじみとして俺も誇らしいぞ。あ、弁当貰うぞ。異、飯食おうぜ。

「……そうだな。今、あの二人に関わったら命がいくつあってもたらん」

横で咲と帝の口喧嘩がヒートアップしていくなかで、俺と異は静かに弁当を食べた。

ふうー、ごちそうさま。さて、昼休みはまだ二十分ぐらい残ってるし軽く食後の運動でもしに行くかなー。

「泉くん、どこ行くのー？」

弁当を食べていた箸を止め、帝と咲が俺を見上げながら言う。

帝との喧嘩が終了し、いまは二人仲良く弁当を食べていたのだ。

……女の子の友情はわからん。さっきまで喧嘩してたのに。

「で、どこいくの？」

黙っていると今度は帝が聞いてくる。

仕方ない、君らの質問に答えてあげよう。俺がこれから向かう場所は……《魔王の小部屋（部屋）》だ。

質問に答えた俺の前には青ざめた顔の異、不信そうな顔の帝、そして相変わらずキラキラした乙女心全開な咲。

え？ナニ？なんか悪いこと言った？ただ、自分の部屋に行くだけなのに。

皆が不安になるのも仕方なかった。なぜならあの部屋に籠った泉くんはまずは意味のわからないモノを生産する、そして決して高校生とは思えない情報収集と行動で問題を起こし解決するのだ。

両手を上に伸ばし、うーん、と背を伸ばし、

「さうてと、何しようかなー！」

軽い足どりで部室に向かう泉くんであった。

泉くん、遂に動き出す？（後書き）

頑張っ て続きを書きますので感想などよろしくお願いします。

猫ネコねこ(前書き)

二話の続きです。そう泉くんはやはり泉くんなんです！

猫ネコねこ

俺は部室に、魔王の小部屋に入る。部室は異様な熱気と鼻をつく臭気……、学校の部室で何故こんな状態になるのだろうか、普通はこうまで異常な状態にはならないのだが、仕方ない……部室の大掃除でもするかな。前に掃除したときは警察から爆弾処理班とアメリカから呼んでもないのに大統領直属の科学者とか言う白衣を着た人達が来て手伝ってくれた、中々話の合う人達で今ではメル友だ、最近では卒業したこっちに就職しろとかよくメールがくる、英語がわからないから無理と毎回断っているんだが。

思い出に浸りながら掃除をしているといろいろなモノが出てくる。日本刀が出て来た、鞘から抜いて見ると銀色の刃が出て来た、一目見て分かる、これは妖刀の類だ。明かに血を吸いたがっている。

何故に日本刀が部室にある？……思い出した。昔、時代劇を見ていたときに唐突に刀が欲しくなったから作ったんだ、確か自然に優しくアルミ缶を二十缶ほど集めて溶かし一本の刀に凝縮したんだった銘は「白曜^{はくよう}」。アルミ缶は学校のごみ箱から拾ってきたら二週間ぐらいで集まった、あとは調合したオリジナルの薬品を数種類混ぜて一時間ほどハンマーで叩いて完成した。恐ろしく切れ味が良く、この時代で切れない物はないと噂になったぐらいだ。

まあ、この刀は持ち主を選ぶタイプの妖刀なのでそうそう被害が出ることはないんじゃないかなと思う……。

とりあえず壁に飾っておこう。

さて掃除に戻るか、何か小ビン見たいなモノを掴んだ、ん？これは香水？いや、硫酸だった……危ねえ……。他にもいろいろと出て来た、ゲーム機サイズの戦車のおもちゃ、中にライフル弾が入っておりボタン一つで発射可能になっていた、なんだか危ないモノしかないのかここは、ん？昼休みが終わった。まあ、いいか。続き続き、他には漫画、腐ったミカン、プラスチック爆弾、腐ったミカン、作

りかけのエアコン、腐ったミカン、水銀の入ったビン、腐ったミカン、テレビ一体型冷蔵庫、腐ったミカンなどゴミ見たいなものから普通ではありえない凶器や薬品、意味不明なモノなどが出てくる、テレビ一体型冷蔵庫とか無駄に電力の消費が激しいだけだろうに、なんでこんなの作っただ、俺。つーか、腐ったミカン多過ぎだろ！？何個出てくるんだよ！？四割が腐ったミカンと言う状態からさらに掃除を始めて一時間ぐらいたったが、もうほとんど片付けて終り残りが少なくなってきた、あとはいろいろなモノを片付けたあとに出てきた段ボールのみ。お次は何がでるかなくと、うーん、モフモフとした手触り、人形か？いや、微かに暖かい、生き物？引っ張り出してみるとなぜか……ねこ？猫である。どのぐらい猫かと言うと三分の一が猫、のこりはすべてネコ、つまり猫である。頭部にリボンがついている。それより飼っていた覚えがないようなあるよね……いや、ある……確か二年前、中学生のときに動物園から生まれたての猫を買ってきて、なんかいろいろ懐かれちゃったんだった、猫はあまり懐かないと思ってたんだけどね。ちなみにこいつの爪は鉄でも切り落とす、怒らせないほうがいい。俺が調合した薬のせいかな？まったく新種の生き物だ、たしか育ててる途中で季節が冬になったら冬眠したんだった、教育テレビで熊の冬眠がやってたからな、マネして冬眠したのかもしれない。まったく、二年も冬眠するなんていい加減寝過ぎだろ。おーい、起きろ、つーかあの時は言わなかったんだが猫は冬眠しない。

にゃー？

にゃー、じゃねえよ！やつと起きたか、寝過ぎだ愚か者。なぜか、泣き出しそうな目でこつちを見てくる

にゃー！！

猫が俺の胸に飛び込んで来た、まあ、よく考えてみればこいつとは二年ぶりの再開だ。二年も寝ていたのに瞬時に時の進み具合が分かるらしい。

にゃゝ、にゃゝ！！

あゝ、よしよし。久しぶりだねゝ、名前はなんだったかなゝ？

えゝと…あれだ、

《コト》だったような気がする。

よ、コト！

みゃゝ？

え、なんでそんな不思議そうな顔するの？あなたの名前はコトだったはず。だよな？

みゃゝ！みゃゝ！

まあ、とりあえず感動の再会は終にして、部屋の片付けを手伝え。そこに落ちてある猫のぬいぐるみと包丁を机の引き出しの中にしまつてくれ。

みゃ！！

包丁を口にくわえ窓際にある机に行き器用に前足で引き出しを開け包丁をしまう。

なんでか知らないがこいつは頭がいい。実験用の餌かな？気がついたら勝手に本を読んだりしてたからな。多分飼い主に似たのだろう。

なんだかんだで大分綺麗になった、これなら他の部屋とかわらんだ

ろう。さて、皆に会いに行くか、コト？

みゃ〜？

帝とか双子とかだよ。帝はあまり昔とかわらんが咲は身長が伸びたし何より女性特有の部分がとても豊かになったぞ。

みゃ！？

良し、お前の女好きが変わってなくて良かった。行くぞ、相棒！！

みゃ〜！！！！

そして俺達は戦場へと向かった……

猫ネコねこ（後書き）

中々話が長くなりそうです……

自分の意志を貫く大切さ（前書き）

泉くんは、部室で再会した猫のコトと戦場（教室）へと向かったのですが、世界の最期を迎えるとか迎えないとかの戦いとかに巻き込まれ……ませんが、とりあえず泉くんです。

自分の意志を貫く大切さ

やっと部室の掃除を終え、久しぶり再会したペットの猫「コト」、
いったいこれから何が起きるのだろうか。ろくなことは起きないと思
うが……。

……こんな感じで回想終了了。

我ながら完璧な回想だぜ。

さて、いつまでも廊下で思い出に浸っているわけにはいかない。
勢いよく扉を開ける、扉を開ける、開け……何かが引つ掛かって扉
らが開かない、なぜ？仕方ない、最後の手段だ。おい、誰か開け
てください。

ガラガラガラッ、扉が開く、中に入ると明かに不自然な棒が置いて
あった。もしかして最近流行のクラス全員でのイジメか？とも思い
つつも帝を探す。まあ、探さなくてもこの時間帯は窓際の自分の席
に座って次の授業の宿題でも写してるだろう、案の定黙々と宿題を
写している。しかもあれは俺のノート。

くくく、愚かな奴だ。いつも答えを丸写しされるから今日は間違っ
た答えを書いてきたんだ、授業中に恥をかくがいい。

「何横で笑ってんのよ、気持ち悪いわね。」

おや、もう宿題は写し終わったのですかな？帝様。

「う……い、いや」昨日はちよつと部活で疲れてたから宿題できな
かったのよね」

明かに不自然に目を反らした。まったく何年の付き合いだと思っ
てるんだ？この程度の嘘など嘘というカテゴリーの中に入れていい
のか悩むほどわかりやすい嘘だ。さてどうするかなー、いつも通り
の対応だとフルボッコにされるんだよなー。よし、今日は違うパタ
ーンでいってみよう。奥義！脳内ドタバタ会議室！！（奥義、脳内
ドタバタ会議室とは泉くんの頭の中の会議室にて泉くんの精神を分

裂させ会議をし考えを出す奥義である。)

会議終了、複数の意見が出た。どれを選ぼうかなと。

1、『お前の嘘で俺の心が傷ついた…もう…お嬢にいけない……』

2、『無視』

3、『耳元で愛を囁く』

……くつ、究極の選択だ。1番はふざけているとして半殺しにされる。2番は無視をすることにより機嫌を損ねた帝に半殺しにされる。3番は自分で考えといてなんだが、3番おかしいくない？まったく関係のないあの選択肢をなぜ思い付いたんだ？うむ、よく考える……、いくらなんでも俺の精神達は帝に半殺しにされる選択肢を出しても帝にたいしてフラグが立つような選択肢を考えるはずがない……、となると、精神達に裏切り者がいる！！いや、……いくらなんでも俺が精神達の裏切りに気付かないはずはない、となると最後に残っているのは俺と俺の精神に干渉した第三者。そして精神世界にしかも俺の脳内会議室に干渉できる存在……もしかして！？犯人は作者か！！つーか、作者以外犯人はいねえ！！て、てめーコラふざけんな作者！！この選択肢もあれだろきつとラノベとか漫画とかの影響だろ！！それともあれか！！作者の個人的な趣味か！！勝手に人の頭の中いじくり回すんじゃないやねえ！！俺はお前のオモチャじゃねえんだよ！あつ、作者め！俺の心の選択肢を3番以外消しやがった！！いいだろう！やってやるよ！やればいいんだろ！これを期に全面戦争だ！！

いつか貴様の世界に侵略しに行つてやるから正座しながらアニメでも見てろコラアァー！貴様がのほんとアニメを見てるときに俺はこのあきらかにバット・エンド行きの状況をチャンスに変えてただの『男』から一つ上に位置する圧倒的な存在『漢 おとこ』にジヨ

ブチエンジンしてやるわあああ！！

「ちよつと、なに突っ立てんのよ。」

……はっ！？くそっ……おのれ帝！！あと少しで作者の世界を滅ぼせたのに（脳内世界にて）。仕方ない頭の中の話はここまでにしよう。俺にはやらなければならぬことがある、作者を殺……いや、帝に向かって愛を叫ぶこと。いざ漢へ。

「……帝。」

真剣な顔で迫るオレ。「え、なに？え、ええ！？」

顔を赤く染めながら戸惑う帝。俺の顔と帝の顔との距離はこれからキスをしようかというカップルの距離。

「……ん……。」

帝が何かを決意したと、いう真剣な顔をしたあと何かを理解したかのように静かに目を閉じた。え、コレあきらかにキスの用意出来てます！的な感じだよね！？なんで今日にかぎって殴らないんだ！！や、やべえ……、この状態はキケンすぎる。ここでキスをした場合だと帝と付き合うことになり……将来こいつと暖かい家庭を築かなければなくなる。く、そこまでして俺を追い詰めたいか帝！！いだろう、その挑戦しかと受け取った！！いざ参らん！！

オレと帝の唇が重なり合おうとした瞬間、物凄い悪寒がした……。いや、殺気と言っても過言ではないオーラを感じた。

俺と帝の横にはなんと巽と咲の双子が立っていた。幾つもの戦場を駆け抜けた強者のオーラに気付いて帝も目を開ける。そして顔が青ざめる。そう俺と帝の横には表現のできない顔の巽（釘バット付き）と地獄のそこからやってきた鬼……、いや、魔王が立っていた……鉈を片手でもて遊びながら……うん、恐いです。今までの人生で2番目に恐い。

「……さて、覚悟はできてるか、泉」

「……帝ちゃん、どこから切り刻まれたい？」

今、生きるか死ぬかの選択に迫られている俺と帝。考える何かこの場を切り抜ける手を考えるんだ、俺……

よし、一か八かだがこいつを使うか……そう今の今まで俺の頭の上から帝の胸元を覗いていたコトを……これで流れを変えて見せる……！

「みんな見るコトを連れてきた、久しぶりだろ？」

（……っ……奴らの集中が途切れた、今しかない！コト、帝と咲のスカートをめくれ……！）

（みゃ……みゃみゃ……）

（構わん！この場を切り抜ける為だ俺が許すやれ……！）

（みゃ……っ……！）

会話が終ると同時に疾風が走る。コトが目にも止まらぬ速さでスカートをめくる。

「……きやあ……！……」

帝と咲が顔を真っ赤にしてスカートを押さえた。

帝がピンク、朝に見たな、咲は……く、黒……？なんてこった！最近見ないうちに色気づきやがってお父さんは許しませんよおお……！

「……見るな……！……」

ぐぼあ……っ……！な、なんだこの威力は……な……？メリケンサック……！なんて奴らだ……たかがスカートを見られたくらいで、ごふっ。ヤバイ、これは肋骨3本は持つて行かれたな。

「な………なんで俺まで………」

……ああ、巽お前もやられたか。

「当たり前よ、乙女の秘密を覗いたんだから」

「たっちゃん、あなたの命は300円、乙女の秘密はプライスレス
お金じゃ買えない価値があるのよ」

帝だけでなく身内にまで酷いこと言われてるよ巽。っ……か、お前、腕折れてね？

「安くね……？俺の命安くね……？それと泉、折れてるよ俺の腕……！っ……かケガの治療費より俺の命のほうが安いってどうよ……！？」

あゝ、腕ぶらぶらさせるな気持ち悪い。

「痛いよ……心が痛いよ……」

俺は体が痛いよ。とりあえず病院行くぞ巽。

「ああ……、痛い……」

泣くな、こつちまで泣きたくなる。そして、俺と巽は死にかけの身体を引きずりながら病院へと向かった……。なんでこんなことになったんだろう……。

教訓、周りの状況に流されるな。

自分の意志を貫く大切さ（後書き）

前回から少し期間があいてしまいました。

悪魔の医者

病院（英：Hospital）

病や怪我などにたいし医療を提供する。また、病人などを収容する施設。

それが一般の人の認識だろう。だが、思春期真っ盛りの高校生には薬品の匂いと若い女性の看護師さん、その二つの属性だけでココロがドキドキしてしまうのである。

「泉、どうした、何一人でブツブツ言ってたんだ？」

……はっ！？危ない危ない、脇腹の痛みのせい意識が少し飛んでいたぜ。

「おい、早くしろよ、泉。それにしても、久しぶりだな、ここに来るのも」

ああ、確かに。俺は半年ぶりだけだな。

「なんだ、半年前に来たのか、珍しいな。腹痛でも起こしたか」

そのとおり、この前、北で起きた戦争に呼ばれた時に敵側の兵を全滅させたお礼だとかなんとかでご飯を食べさせてくれたんだ、ちゃんと報酬は貰ったんだけどね、遠慮しなくていいって言われたからちよつとだけ食べ過ぎちゃったんだよ。

「そういえば、半年前に『魔王』が現れたって噂が流れてたが、やつぱりお前か」

うん、巽や咲と戦場で逢わなく良かったよ。

……魔王、俺のもう一つの呼び名。でも、魔王って誰が最初に呼んだのかいまだにわからないだよね、気が付いたらその名で呼ばれるのに慣れちゃったから。

「あと、敵から奪った食糧だけじゃあきたらず味方の食糧も食い尽くし壊滅的なダメージをあたえたとか聞いたんだが？まあ、あながち嘘ってわけじゃないな、さっきの話を聞いたらな」

ソナコトナイヨ……

「なぜ、そこでエセ中国人みたいな喋り方になる……」

……さて、行くか、巽。大丈夫さつき学校終わったときに電話して予約入れといたから。

「おい……、まあ、いいか」

その前に一言だけ言わして貰おう。

「俺の胃袋は宇宙に近い……！！」

「はいはい」

ひどい、そんなに簡単に流されたら泉悲しいい。

「黙れ、気持ち悪い」いいもん。一人で生きて行くもん。うわああああんー！そう、この時、俺は一人で生きて行くと決めた。これからの生活は俺に辛くのかかってくるだろう、でもめげない、だって男の子だもん。そうと決まったら明日へ向かって走りだせ！うおおお！！

病院と反対の空に浮かぶ熱く萌え……違った、熱く燃え上がる夕陽に向かつていざ！「お、おい！」夕陽に向かつて走り出す俺、俺を止めようとする巽。止めてくれるな巽、俺はこの試練を乗り越えなくちゃいけないんだ。

「ツブルア！！」

車に跳ねられました。「止めようとしたんだがな」哀れむような目で俺を見下ろすな。俺はこんなところで死んでたまるか……！

「そのクソガキたち！！病院の前で暴れんなって何回注意されれば気がすむんじやー！！」

病院の入り口にてタバコを口にくわえ、白衣を着て仁王立ちしている茶髪の女性。その女性の最大の特徴は小さい、見た目はまさに白衣を着た小学生。でも、見た目はあれでも立派な医者で外科医。名前は大神美菜病院ではその神業てきなメスさばきから『送り狼』おおかみみなと言われ、生死にさ迷ってる患者を現実まで送り届けている。俺とは五年前からの顔見知りで、巽と俺は良くお世話になっている。

「現れたな、美菜。見た目は子供、頭脳は大人、実年齢は26さ……」

…つうばああ!!」

「女性の歳を気軽に言うんじゃないねー!! 大体あんたはなんで私の歳知ってたんだ? ああ!？」

巽、バカな子。みなちゃんに歳の話はダメでしょ。まだ、大きくなれるよー、成長期だもんねー。

「私に喧嘩売ってるのかい、泉?」

「いいや、気のせいじゃないかなー? ほらみなちゃんいい子いい子」

「泉、絶対喧嘩売ってるだろ。喧嘩売ってるよな。あ、こら頭を撫でるなっ!!」

「昔から仲いいよなお前ら」

あれ、巽まだ生きてたの? みなちゃんとは昔よく一緒に遊んでたし、てつきり年下の子かと思ってる勉強とかも教えてたし。

「散々なのは私だ。自宅から大学に通うの大変だから大学近くのアパートに引っ越して来て右も左も分からなかったころ、親切なお兄さんが道を教えてくれて、勉強もできてあの時の私にとって泉は憧れだった。」

そうだね、あの時は小学生が道に迷ってるなーと。なんか、その時に懷かれて『泉さん』と呼ばれてたし。勉強が難しいってよく泣いてたから教えてあげたし、小学生のわりには難しいこと習ってるなーって思ったな。

「そう、途中で気が付いたよ。親切なお兄さんは私より年下の中学生で、それを知ったときは一回死んでもう一度最初からやり直したい気分だった」

「つーか、中学生に勉強を教わってたのか……」

それについては大丈夫だよ、巽。俺、医師免許持ってたから。

「いったい何者だ、お前は」

「私もそこは疑問に思っていたんだが、なぜ中学生が医師の免許を持っているんだ」

え? なんで、おかしい? ちゃんと国家試験受けて合格したよ?

「ちよつとまで。いや、中学生の時点で国家試験に合格するな!!」

私はあんなに苦労したのに……」

「美菜、あまり深入りしないほうがいい。どうせ泉のことだ考えるだけ無駄だ」

酷いな、ちゃんと臨床研修もやったよ。きちんと手順を踏んで得た資格なんだよ。

「いや、普通、中学生は医師の国家試験なんぞ受験できないだろ。大体なんで医師免許なんか持ってんだ」

それは、話すと長くなるんだが、手短に言つと……、

「お医者さんごっこしたかったから!!」

……はっ!?!つい本音が!!

「もういい……、俺らはケガの治療に来たんだ。美菜、さっさと治療しろ」

えー、人の秘密を聞いたいてその反応はないんじゃないかなー。

「……治療してやるから中に入れ」

美菜ちゃんも無視しないで……お願い。

「早くこい泉、私が診るかぎりお前の状態は普通だと重傷だ」
うん。もう死にそうだよ。

「なんで死にかけの状態のはずなのにお前らはそんなに元気なんだ」
そんなコトないよ、もう立ってるのも辛い状態だよ。ほら、足もプルプルしてるし。

「一度お前ら身体を解剖してみたいんだが」やめてー、死んじやうから。巽ならおーけーだよー。

「……。」

巽?呼んでも返事がない、屍のようだ。やけに静かだなーと思ったら。あー、美菜ちゃん巽が死にかけています!!

「大丈夫だ、もう中に連絡してある」

美菜ちゃんが言つと病院の中から数人の医師と看護士さんが出て来て巽を連れ去つて行つた。

「お前も行け」

えー、あれ？なんか目が怖いお医者さんが数人残っているんですが、あ、やめてー！！連れていけないでー。

怖い目をした医者に両肩を押さえられ、引きずられていくオレ。だ、誰か！！助けてくださいー！！

犯・さ・れ・るー！！

「人聞きの悪いことを言うな！！黙って連れていかれな。それ、麻酔」

いや、やめ……身体が動かない。もう無理か……

そして、病院内に二つの悲鳴が上がった。

病院での日常（前書き）

病院は腕のいいお医者さんがいるところに行きたいですね、いや、
きちんとしたお医者さんがいるところがいいですね。

病院での日常

……もう、お婿に行けない。

「ああ、そうだな……」巽も同じ、人には言えないような、あんなことや、こんなことをされたに違いない。まさに、人にあるまじき行為をされました。「お前ら……、そんなに治療されるのがいやだったのか。」

「いや、治療されるのがいやなんじゃなくて、治療する人がいやだったんだ」

んー。それは、きっとはずれな医者にあたったとしか言いようがないね。

「何をバカなことを。うちの病院ははずれの医師はいないぞ。私を含めて皆優秀だ」

確かに腕はいいかもしれないがそれだけでは語りきれないストーリーを抱えている医者が多い。

「俺の治療をした医師は人生残りわずかって感じの爺さんだったんだが……」

「おお、それは長老だな。院内でもトップクラスの医師だぞ」

確か、担当した患者はなんか……うん、まあ、いろいろ噂されているけど腕利きの医師でよかったじゃない。

「お前も治療を受けてもらえばわかるさ……」

巽、お前の言いたいことはわかるよ、あのじいさんすごく熱苦しいもんな、筋肉が白衣の下から盛り上がってるもんな、顔と体が合っていないもんな、つーか、女の人に治療してもらいたかったただけだろ。「もう、思い出したくない、筋肉いや」

ふむ、これは重症だな。じゃ、帰るか。

「ああ、もうこんなとこに長居したくない」

手際よく荷物をまとめて帰ろうとすると、

「ちゃんと金は払えよ、過去のツケの分も含めて大体三十万ぐらい

だ」

そうか、いつのまにかそんなに借金が貯まっていたのかー、さて巽逃げるよっ……！

「おうっ……！」

巽と一緒に走り出す。底無しのスタミナを持つ俺達なら余裕で逃げ切れる、逃げ切れるはずだったのだが、

「毎回、そうやって逃げられてるのに私がなんにもしてないとも思ったのか？」

救急車にはねられました。

「おっと、病院玄関前にて事故発生。すぐにオペの準備、私がやる。あと保険屋呼んで。」

「み、みな。き、貴様謀ったな……！！！」

た、巽。大丈夫……、じゃないな。それ明かに入院コースだね。

「い、泉……、俺はもうダメだ……俺を置いて逃げる……っ……！！！」

おけ。じゃあな、巽。お前の死は忘れないような気がする（多分）

俺は倒れた巽の屍を越え魔の手を振り切りなんとか逃げることができた。

持つべきものは友達だね！

病院での日常（後書き）

新しく、「泉くんの非日常」を執筆中です。

負け犬と鮫

いやー、病院は何て言うか長居するべきじゃないねー。
解剖されそうで怖いです。

辺りも暗くなりもう普通の家庭なら命の残骸を食す時間帯だろう、
お腹へったー。

「と、言うわけで帰ってきました、我が家」

「お帰りなさい、息子よ」

出迎えたのは俺の父親だ、見た目が大学生ぐらいなのはなんか知り
合いにかけられた呪いをかわりに引き受けた結果らしい実際は年金
をもらうまでそう遠くない歳なのだが。

「今日の夕飯は鮫の丸焼きだ」

なぜサメなんだ…、台所の床にはなぜか冷凍されたホオジロサメが
横たわっている…。

目測による全長は約8 m、重量は3500キロってところかな、食
いがあるぜ…。

「昨日、神奈川でとってきました」

しかしながら、うぬぬうう…、サメを夕食にする動機がわからん。
まあ、いいか。

「ごはん、ごはん。」

「あ、醤油がきれている買ってきてくれませんか。私はその間に解
凍して焼いておくので」

んー、この時間なら商店街にあるスーパー《投げ売り》が開いてい
るはず。

「あと一時間ぐらいで解凍できるから」

一時間か、それだけあれば割り箸でゴールデンレトリバー用の小屋
を作ることが可能だ。「わかった。じゃ、行ってきますよ」

家を出る、もう辺り一面星空が広がっていた。

なんだかんだで商店街に着きスーパーで無事醤油を買った、後は帰

るだけなんだが最近、一人になるとよく考えることがある…、世の中面白いことだらけだと。

なぜ、そんなこと思ってた？

それはね、

「おらあつ！！」

目の前の状況が物語っているから。弱そうなのやしつこ一人を五人の頭の悪そうな方達が囲んでいる。

「おい、早く金だせよ！！ 自分の命は大事だろー！？」

あきらかな恐喝ですね、そして不良ですね、わかります。そして唐突ですが世の中には四種類の人種がいます。

一つ……権力者、自分のエゴで力を奮うゴミ達。

（中にはちゃんとした方たちもいます）

二つ……被害者、主に搾取される可哀相な人達。

（力に負けないで強く生きてもらいたい）

三つ……負け犬、不良またはヤンキーと呼ばれる。俺、カツコイ、俺強えーがしたいカスの集まり。

（決めゼリフは、ぶっ殺す、かかってこいよ、など）

四つ……オタク、アニメゲームなど二次元の世界にのめり込んでしまった中毒者。

（寿命で死ぬまでオタクを貫き通した者を神の子羊といい、二次元に転生できると巷でもっぱら噂になっている）

「た、助けてくださいっ！！」

うわあ、こっち見てるよ、めんどくさいなーもう。仕方ない……

「君、いや、あえてこう呼ぼう、負け犬くん。負け犬くんさー、やり返してないよね？ そのヤンキーくん達無傷だし」

「当たり前じゃないですかっ！！　僕だけじゃ勝てないですよっ！！」

「ふう、ねえこんな格言があるんだけど知ってるかい？　当たって砕ける」

「無理ですー！！」

ダメだー、負け犬オーラが漂ってる、これはヤンキーくんじゃなくともボッコボコにしたくなるな。

「なんじゃーっ、お前はっ！！　お前ぶっ殺されたいんかっ！！」

えー、俺にまでからんでくるのー、これはうざいな。
よし、

「負け犬くん、君に力を見せてあげよう、いいかい力はこうやって使うんだよ」

右足を前に出し、半身になり手を上と下に伸ばし柏のように手を打つ。すると不良達が地面に張り付けられる、俯せ、仰向けどちらもコンクリートに減り込むくらい、いや、減り込んでいる。

「命まではとらないよ、全身粉碎骨折あたりで止めておこう」

ヤンキーくん達は血の泡を吹いてびくびくしている。もう返事がないただの屍のようだ。

「す、すごいですっ！！　あの、僕を弟子にしてくださいっ！！」
んー、もやしっこ改造計画か、面白い。

「いいだろう、俺のことは師匠と呼べ」

「はいっ！！　師匠っ！！」

「それで負け犬よ、貴様の名は？」

「原はら達たつのり範のりと言います、よろしくお願いしますっ！！」

「よし、では原くんよ貴様を鍛えて強い男にしてやる」

「はいっ！！」

「まずは力をつけるためには食事から、ついて来い」

「はいっ！！　師匠っ！！」

これから始まる弟子改造計画が始まる。

まずは、腹ごしらえだな。サメが俺を待っている！！

負け犬と鮫2（前書き）

果たして負け犬くんの未来は…、果たして鮫の味は…

負け犬と鮫2

「ただいまー、醤油味の醤油買ってきました」

「お帰りなさい、もうそろそろ焼き上がりますよ、おや？」

「おじゃましますっ!!」

「いらつしゃい、負け犬くん」

負け犬を連れて帰宅したわけだが。まあ、説明なんぞしなくても理解しているからいいだろ、親父だから。

「ふむ、なるほどね。そこにいる負け犬くんを一人前の漢に育てるんだね、面白い」

焼き上がったシャークを親父と原くんと頬張りながらこれからの計画を練る。

「まずどう強くなりたいかを自分で決めないことには先に進めないよ、原くん」

なかなかやるなシャーク、焼肉のタレで食べてみるか。

「はいっ!! 師匠!!」

「強くなると言う選択は狭そうに見えて広いからね、ただ強くなるだけじゃこの先鍛えても待っているのは破滅だから。負け犬くんはどうなりたい？」

「僕は……」

「簡単に答えが出せるものじゃないかゆっくり考えなさい、とは言わないよ。この程度の答えがすぐだせなければ中途半端な強さに溺れるだけだよ」

む、父よ。魚系にタバスコと塩とはなかなかやるな。

「醤油味飽きちゃった」

父と二人でシャークに合う味付けを思考する。

「ああ、原くん君の答えを聞かせてくれ」

「……俺、誰かを守る強さが欲しいです。師匠見たいに不良から弱いものを助けて上げたいです……」

あの短い間にその答えがでるか……。なるほど、長年イジメられてきたタイプの人間の大体は不良に仕返しがしたいとか自殺して人生やり直すとか破滅思考タイプと同じ境遇や他人の不幸を救いたいという正義思考タイプがいるんだよね、原くんは正義思考タイプ、むかつくぜ。

「つまりヒーローになりたいんだね、負け犬くん」

親父のヒーローという言葉に恥ずかしそうに照れている負け犬こと原くん。

なんかむかつくがこれが原くんのイジメられっ子気質というモノかな。

ちなみに会話しながらでも食事は出来るんですよ、鮫一匹を食べ尽くしました、味の感想はご想像にお任せします。

やはり食べる魚はマグロだねっ！！

食後のイチゴ牛乳を飲みながらなんだが、

「じゃ、まず強くなるために筋トレと学業を頑張ってね」

「はあ、なんか普通ですね…」

「とりあえず筋トレは腕立て、腹筋、背筋、スクワットを一日百回やろう。十日事に百回量を増やしてね、勉強は全部の教科を満点とってね。一夜漬けはダメだよ、これを一年続けたらもう一回訪ねておいで。」

「一年ですか…、それまでまたイジメられるんですか…」

「逆に言えば後一年我慢すれイジメられなくなると言うことだよ」

またイジメられる日々を思っているのか、不安そうな、泣きそうな顔の原くん。

ふいふ、イチゴ牛乳うましっ！！

「…頑張ります、頑張って師匠見たく強くなってみせます」

がんばれ、原くん。

じゃ、一年後に会おう。

「はい、ありがとうございました」

原くんは帰ってしまった。なんかいろいろ吹っ切れたみたいだな。

「あれ？、彼は？」

帰ったよ、なんか静かだと思ったら寝てたのか父。

まあ、筋トレと勉強ができればそこらへんの不良には負けないよねー

乙女と出会い

さあ、朝です。昨日食した鮫が夢に出て来た今日この頃、夏の日差しで干からびそうになるかもしれないのに毛布、布団、羽毛布団と三枚重ねで寝てましたよ、だってクーラーが壊れて冷房にしても暖房になるんだもん。室内温度38°。外の気温33°。外より部屋のほうが暑い。無駄にサウナ気分を味わいつつ意識を失ってました。

まあ、暑さに耐性付けしないとこの先生に残れないしね。

とりあえず、シャワーで汗を流し大量の水分を補給し、思い出したことがあります、実は中間テストなるものがあります、学校には教科書類はいつも置きっぱなしなので持っていくモノもなく空の鞆を持って登校。

「では、学校行つてきます」

誰もいないリビングに一声かけて家をでる。シャワー浴びて髪をタオルでわしゃわしゃしながらリビングに行くとテーブルには書き置きが二枚。

『旅にでます、父』

『世界の謎各種について議論しに行つてきます、母』

この書き置きを見てわかる、うちの親は暇人なんだなと。

それに、テストの始まりの日は帝も起こしには来ない。ちなみに帝の成績は下の下、勉強のできない残念な子です、運動はめっちゃできる……はずもなくこれまた下の下、だけど戦闘力とバランス感覚と体の軟らかさは神掛かりである、摩訶不思議な生態機能。

とりあえず、パンをくわえて学校に向かう。もつろん、フランスパンです。

普通に登校するとすぐ学校に着いてしまったため、あえて遠回りする

「新しい出会いはないものかね」

などと独り言を言い始めてしまう末期症状な状態なわたくし泉ですが、実は月に一回は出会いを求めて待ちをさ迷う狩人。

「危なああああいつ！！どいてえええー！！」

「甘ったれるなっ！！」

曲がり角から暴走原付きバイクが現れた。

それより、どいて？ おかしな事を言う、ここは天下の国道、誰にも指図はされない。

ブレーキをかければいいものをさらに加速してくる原付きを問答無用で蹴り飛ばす。

滑りながらぐしゃっと潰れた音とともにガードレールに接触。

ふ、俺じゃなきゃ重体もしくは即死ですよ。

蹴り飛ばしたあたりを見渡して見ると、あー、バイクが前半分潰れてるよ…おい、ちよつと待て。

「あああー俺のフランスパンがつ！？」

思わず叫んでしまったが歩道の所に吹き飛ばされたのだろう倒れている少女、の下敷きにされてしまった朝ごはん、なぜあんなところに…、フランスパンよ安らかに眠れ。

パンを潰した犯人の顔を拝んでやろうと近づいてみたんだが…。

「……………」

……別のモノを拝んでしまいました。すみません、蹴り飛ばしといてなんですが…下着が丸見えです。

白と黒のシマシマ…、目の保養になるんだが一応外傷はかすり傷程度、骨折は無し、この子も結構頑丈だ、女の子らしさのやわらかさを残しつつほっそりとした体に無駄のない筋肉の付きかたをしてる。ちよつと待て、この外見は……、これはこれは、過去出会った中でもトップクラスの美少女だ、しかも大和撫子とはきつとこの子の為にある言葉なのだろう。真っ黒で綺麗な髪は腰ぐらいまであり、小さい輪郭に長いまつ毛に色気を感じさせる唇。

身長はちっさ……、いや、これ標準ぐらいか？ いや、ちっさい。
和服とか似合いそうだが残念ながら来ているのは学生服、しかも、
我が学校の制服だ。

「うんう……」

おっと、加害者一名の生存を確認。一応、あつちはバイク、こつちは歩行者と言うことで相手を加害者にしますよ。

ゆっくりと女の子の目蓋が開き、軽く目を擦りながら体を起こした。

「ここどこ……？」

「二り高（式里弐高校略）近くの交差点ですよ、加害者様」

加害者様は目を擦りながら辺りを見回す。

少しずつ状況を把握してきたのか、身体に怪我がないか確かめ始めた。

「怪我はかすり傷しかないよ、現代医療で傷跡が完全に消えるぐらい小さい、骨折はしてないよ、打撲は解らないけどね」

「…、そうですか、よかったです、これでも乙女なので。」

まあ、彼女の身体だから言わなくても解ると思うけど、これからの円滑なコミュニケーションのために少しでも話をしておきたい。

「重要なのもう一度、乙女なのです」

こうして自称乙女と出会いがあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4321f/>

泉くんと平和な日常

2011年11月15日14時47分発行